

タイと福島を繋いで10年。さらなる友好関係に向けて 「船と翼の会ふくしま」による タイとの交流事業

菅野裕子さん

福島には「船と翼の会ふくしま」というボランティア団体があり、10年前からタイとの交流事業を行っています。

「船と翼の会ふくしま」の前会長で、交流事業を立ち上げた菅野裕子さんにお話を伺いました。



■ タイとの交流事業を始めたきっかけは

「船と翼の会ふくしま」は、内閣府青年国際交流事業（航空機による海外派遣・東南アジア青年の船など）の参加者が設立した社会貢献活動を目指す団体で、52年の歴史があります。

タイとの交流事業のきっかけは、各国の青年が内閣府の招へい事業で日本を訪れ、「NPOマネジメント」をテーマに話し合った際、「船と翼の会ふくしま」が用意したプログラムに感銘を受けた「ASSEAY Thai land」という団体のタイの青年から、「今回限りではなく、今後も共に学ぶ相互交流をしましょう」と提案を受けたことです。この団体は内閣府青年国際交流事業に参加したタイの人達の全国組織です。

それまでも個人的に「タイに遊びに来て欲しい」と言われたことはありましたが、団体として提案を受けたのは初めてだったので、自分達のプログラムが認められ、とても嬉しかったですね。

■ 東日本大震災のときのタイの人達の思い

東日本大震災の年は、タイも大洪水に見舞われた年でした。自分達も大変なのにもかかわらず、「避難を希望するならいつでも来ていいよ」と言ってくれました。また、タイで福島犠牲者のためにお坊さんと呼んで祈禱会を開いてくれたり、震災直後の3月末には会宛に3000ドルの義援金を贈ってくれました。

タイの方達が福島を思ってくれていることが伝わり、とても嬉しかったですし、タイを思う気持ちがより強くなりました。

10年前に始めた事業ですが、これからも良い交流になるようお互いに努力していきたいと思っています。そして、たくさんの方達に関わって欲しいですね。



黄色い帽子贈呈式後、花いちもんめを体験する現地小学生

■ 交流事業の具体的な内容は

1つめは「夢企画～福島・タイ交流プログラム」で、1年ごとにスタディーツアーを交互に実施しています。いつもタイから10名が来て、福島からは5～6名が行きます。スタディーツアーでは、現地の学校を訪問し生徒と交流したり、一般家庭にホームステイするなど、普通の旅行にはないプログラムを経験できます。また、日本よりも貧富の差が大きく、それを目の当たりにすることで、メディアでは伝え切れない現状を実感することができます。タイの方が福島に来る際は、皆さんがそれぞれ料理や舞踊など得意分野を披露してくれます。またタイの代表として来ているという意識が高く、自分の国のことを語るのが上手で驚かされます。

2つめの「Yellow Hat Project」は、小学1年生が使う黄色い帽子を回収し、タイで帽子を必要としている学校や施設に贈呈する取組です。

今後タイとの交流事業に入れてみたいプログラムは、タイ語を使ったワークショップです。タイの方が福島に来て小学校で交流した際、そこで交流した3年生の子ども達ですぐにタイ文字を覚えて、自分の名前を書いたりしていました。

タイ文字は日本人がみると独特の形をしていますが、それが子ども達には新鮮だったようです。お互いにタイ文字で書いた名前を見せ合って楽しそうにしている、タイの方達も嬉しそうだったのが印象的でした。それまでタイの方々とは英語でコミュニケーションをとっていたのですが、子ども達の様子を見ていて、お互いの国の言葉に触れる機会があると面白いと思ったのです。



福島でのスタディーツアー参加者の皆さん